

東京スロープとブランケット紀行

対談 羊屋白玉と上田假奈代



ためらって、
さまよって、

とむらい

目次

「とむらい」のためのリハーサル 2

上田假奈代と羊屋白玉2016年如月対談 3

もうすぐ3歳

わたし、実は詩人なんです

死生観というもの

何百人くらいとむらった？

一郎さんのこと

いろんなおじさん、いろんな人生を語る

女の方は来ますか？

釜ヶ崎に訪れる人たち

彼はわたしに言いました

ほぐれて、おさまって、ひらいて

「コルムは日常か？」

参加型カフェという形

わたしは探偵じゃない

「コルムは何年目？」

わたしには演劇が小さすぎえる

間に在りながら、間を突き抜けてゆくということ

「とむらい」について 21

東京スープとブランケット紀行とは 24



「とむらい」のためのリハーサル

東京は、東の都。地理的にもそういつてよいのだと思います。そして、歴代の、古今東西の都を見てゆくと、古代都市バビロンが洪水などによって破壊され、肥沃で緑あふれる土地だったメソポタミア平原も砂漠化し、大都市の面影をとどめない廃墟となったように、平安京が度重なる戦渦によって、市街地の過半を焼失し、政治の中心が東へ移行するなか衰退したように、一度、滅びないことには、都とは呼ばれないのかもしれないかもしれません。

「東京スープとブランケット紀行」は、東京の中の、いくつかの滅びと、その兆しをこの目で確かめてきました。江古田という街では、闇市から続いた市場が2014年大晦日に閉場しました。伊豆諸島南端の青ヶ島は、1785年の大噴火で避難した島民が、50年かけて還任（全島民帰還）を果たした歴史があります。そして今でも火山活動が続いています。奥多摩町の旧小河内村集落は、東京都民の水道専用貯水池建設のため、1957年に水没し、奥多摩湖の湖底に眠っています。

日々起きている、喪失と再生のなかで、その間にある変わり目のその時を「とむらい」と呼ぶことにして、活動を続けた2015年でした。そのなかの一端を、小誌『ためらって、さまよって、とむらい』に、まとめました。

「とむらい」のためのリハーサルは、まだまだ続きます。

上田假奈代と羊屋白玉 2016年如月対談

釜ヶ崎の上田さんと、江古田の羊屋が、2016年2月に「対談紀行2016年春篇」で初めてお会いして対談しました。お互いの活動を通して感じていること、二人だから語れた対談の様子を、東京スープとブランケット紀行のリサーチプログラム「江古田スープ」の記録写真と共にお伝えします。



羊屋白玉（ひつじやしろたま）

1967年北海道生まれ。明治大学中途退学。「指輪ホテル」芸術監督。東京スープとブランケット紀行ディレクター。劇作家、演出家、俳優。代表的な作品は、2001年、ニューヨークでの同時多発テロの直後、ニューヨークと東京をブロードバンドで繋ぎ、同時上演した「Long Distance Love」。2006年北米ヨーロッパをツアーした「Candies」。2012年ブラジル4都市をツアーした「洪水」。2013年瀬戸内国際芸術祭では海で、2014年中房総国際芸術祭では鉄道で上演した「あんなに愛しあったのに」。2006年、ニューズウィーク日本誌において「世界が認めた日本人女性100人」の一人に選ばれ、表紙を飾った。

<http://www.yubiwahotel.com>



上田假奈代（うえだかなよ）

詩人・詩業家。1969年生まれ。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめ。1992年から詩のワークショップを手がける。2001年「詩業家宣言」を行い、さまざまなワークショップメソッドを開発し、全国で活動。2003年ココルームをたちあげ「表現と自律と仕事と社会」をテーマに社会と表現の関わりをさぐる。2008年から西成区(通称・釜ヶ崎)で喫茶店のふりを行っている。「ヨコハマトリエンナーレ2014」に釜ヶ崎芸術大学として参加。NPO法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム)代表。大阪市立大学都市研究プラザ研究員。2014年度文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞。

<http://www.cocoroom.org/>

羊屋 「東京スープとブランケット紀行」は、もうすぐ三歳になります。そして、とうとう、上田假奈代さんと対談する段階に突入しまして、これがどういう段階なのかは、今はわかりませんが、今日が特別な日になるだろうということは、すでに実感しています。そして、この「東京スープとブランケット紀行」という企みの紹介を、これから始まる対談の枕とさせていただきます。

始まりは、わたしの個人的なことです。2012年にわたしがずっと一緒にいた猫が、22歳で亡くなりました。まあ大往生したんですけど、その大往生に、わたしの友人たち、彼等は猫の友人たちでもあったわけなんですけど、こぞつて駆けつけてくれました。看病の間の5日間、大きな鍋でスープを持ってきてくれたりとか、仕事道具を持ち込みながら付き添ってくれたり、何十人も入れ替わり立ち替わり集まってくれました。その亡くなるまでの5日間、猫を囲んで、どうやってお葬式しようとか、剥製にしたいとか、耳だけ食べたいだの話しました。同時に、自分自身が死んだらどうされたいとかという話に発展して、今はもう火葬しか選択肢はないですけど、ほんとうは焼かれないとか、土の中がいいとか、海がいいとか。わたしたちは、自分が死んだ後は他の人たちに委ねられ

る訳ですけど。それも含めて、友人たちとそういう話をする時間を、この猫はくれたんです。わたしたちは、そのことに感謝をしながら、猫の散歩道だった桜の樹の下をスコップで掘って、お花とマグロで埋め尽くしました。猫の死を友人たちと迎えた5日間、それがまさに「とむらい」っていうことだったんですけれど。

そしてその時、わたしは、今までそこに在ったものももういない、人生的にはものすごいクライシスを迎えたわけです。カタルシスだったかもしれない。4年くらい経ちましたが、まだ脱却できるわけもなく。まあとにかくですね、まだそのクライシスだかカタルシスのど真ん中の時に、東京でアートプロジェクトを始めることになりました。それが「東京スープとブランケット紀行」です。

東京ベースのプロジェクトというところで、あたりまえ過ぎる東京での生活をもう一度振り返ってみました。北海道から大学に入るために上京した頃、そしてまもなくあの猫に出会う訳ですが、その頃の東京は、とても近未来的でしたし、海外に行ったりすると、「日本」より「東京」がポピュラーでした。誰もが、「トーキョー」って発音できるし。日本と東京が結びついてないくらいに感じました。そして今は、まるで遺跡の街を歩いているようだと、死

んでゆくようだなと。だとしたら、東京の「とむらい」は、どうしたらいいんだろうと。猫のとむらいに関わったことと、東京というのを安直に結びつけたのかもしれない。だけど、今でもこのモチベーションはずっと続いていて、だったらこうした観点から、東京っていうものを根っこから確かめてゆく作業を続けよう。その根っこっていうのは、どこまで掘り下げるかわかりませんが、未来っていうのを考えたときに、未来は過去のなかにあるような気がしまして。未来が見えるまで過去をどンドン掘り返そうと思っっています。

そういう考えの一環で、去年は青ヶ島に出かけました。伊豆諸島の一番南、一応東京都なんですね。東京で一番人口の少ない村で、170人くらい住んでいます。八丈島から8人乗りのヘリコプターに乗って、着陸と同時に、台風がやってきて、その生活や自然を見て、話を聞いてきました。青ヶ島でお世話になった人とはまだ関係が続いていて、まだ見つめている最中です。

今年は、東京の西の端にもゆきました。奥多摩湖です。人工の湖で、東京の人たちが飲む水は、ほとんど、そこからきてますね。湖になる前は、小河内村があり、人が住んでいたのですが、昭和32年ですかね、村は東京の水のために湖に沈みました。

加し、海で公演をしたり、トンネルの中で演劇を作ったりしています。その土地の記憶を受け取って作品にするような作業です。

一方、「東京スーヴとブランケット紀行」では、演劇の作品は作っていません。でも作らないというこの機会は、自分の創作のタイミングとマッチしているのかもしれない。それで、なぜだか、今回、「とむらい」という名のお膳というか、ランチョンマットを作るに至りました。さつき「とむらい」という言葉を出しましたが、いろんな人のとむらい話を聞きたいなと思ってました。話を聞く場の、真ん中にあるもの、間あいだとか道みたいなものとして「とむらい」がある。これ



そして、江古田。池袋の近くに江古田という町があります。西武池袋線の江古田駅周辺ですが、自分のいま住んでいるベースとして、その町を月に一回歩き回る「江古田スーヴ」というプログラムのしています。毎月17日。あの猫の月命日ごとです。

わたしは、普段は演劇を作っていない。「指輪ホテル」という、劇団というより作品の連続体みたいなものですかね。劇場でもやりますが、劇場ではないテニスコートとか、本屋さんとか、廃工場とかでもやっています。最近、瀬戸内国際芸術祭や大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレに参



一緒に食事が乗っかって、とむらいたい人や物について、食べながらお話しをしていただく。わたしがインタビューするんですけど、その人とわたしの間にあるものの象徴として、お膳がある。お膳には、食事だけではなく、たとえば亡くなった人が、ごろんと寝転んでいるのかなと、感じることもあります。

このお膳「とむらい」は、わたしを含めて4人の作家たちが作りました。それぞれタイトルは、春夏秋冬の境目にあたる、「春分、秋分、夏至、冬至」です。春分と秋分は、お彼岸の頃で、亡くなった人をお迎えしたりお見送りする。死者の魂と会えるんじゃないかなろうかと、日本人が思っている時間ですね。夏至と冬至は、古代においては、魂が増えたり、魂が少なくなったりするので、鎮魂をする時期でもあったそうです。考え方は現代と古代とで違いますけど、夏至と冬至も加えてそういう失ったものと亡くなったものたちと出会える瞬間という類縁性から、「とむらい 春分、秋分、夏至、冬至」と、名をつけました。そちらをご覧ください。(展示されている「とむらい」をさして)

羊屋 ということで、こちらは、上田假奈代さんです。釜ヶ崎という西のほうから来ていただきました。どうもこんにちは。

上田 はい、どうもこんにちは。大阪西成釜ヶ崎から参りました。実は、羊屋さんとは今回初対面で、それほど打ち合わせもせずに話しましょうということですが、今、隣に座っております。よろしくお願ひします。

羊屋 よろしくお願ひします。

上田 今のお話を聞きながら、いろんなことを思いました。**わたし、実は詩人なんです。**



羊屋 はい。

上田 ええ。それで詩っているのは「言（ごんべん）」に「寺」って書くんですね。人間の死ぬ「死」、それと同じ音な訳です。だからこの「詩」と「死」が同じ音であるっていうのは、すごい大きな意味があつて、偶然じゃないんだらうなと思つていらっしゃるんですね。その「死」を巡る「詩」というか、そこにどうしようもなくある死の周辺にいますと、それを時々色々な形に表したくなるんです。

例えば墓地の中で詩を作つて朗読します。わたし一人じゃなくて、みんなで墓地に集まつて、好きな墓石のそばに行つて、ちよつと座つて詩を作つて、20分ほどしたら戻つてきてねつて。そして、それぞれの人が作つた詩を読む、そういうプロジェクトをしているんですね。

見ず知らずの墓石の名前を読んで、その方に手紙を書くような詩を書く方もいます。身近で亡くなった人のことを書く方もいます。みなさんに朗読してもらうんですけど、涙が出てしまつて全然読めなくなつちやつたりする方も中にはいるんですが、だからといつてわたしも、誰も、代読しないんです。ただ、待つている。

羊屋 作つた人が読むのを？

上田 そう、作つた人が読む。このときり。ゾンビ映画で、スーパーマーケットに集結して、お買い物してたりするシーンつてよくありますよね。ゾンビになつても、生きてた時にやつてたことをして、その可笑しみや、愚かさや恐怖は、まさに「生きてた時に何をしていたつていうのは、生きてる時はわからない」つてことかなと。それを台詞として、ゾンビのキャラクターが発言する。そんな作品を作つています。

でも「とむらう」つて儀式でしょ？ それはまだ、演劇化できてないんです。「ハレ」と「ケ」で言うと、「ハレ」が演劇だという説が主流です。「ケ」である「とむらい」が、演劇になつたら、それはパラダイムシフトかもしれません。

上田 うふふ

羊屋 あの、それで、**假奈代さんは、今まで、何百人くらいとむらつたのですか？**

上田 ええと。うーん。数えたことはないけど。立ち会えたり、見送つたり、もう死んでましたよつて言われたりするよいうな、どうしようもないみたいなのも含めて、釜ヶ崎つて本当に死ぬんですよ。

羊屋 ここで死のうと思つて来るんですか？

の詩は、詩がいいか悪いかとか、上手か下手なんて、かなりとつぱらわれる詩ができます。そして、読まれるのをみんなです。

で、今日は「とむらう」という言葉が重要になつています。羊屋さんが、演劇という手法を持つなかで、「とむらう」つていうのは、きつと何か大きな関わりを持つているからではないかしらと思つたんですね。このプロジェクトが、そこまでの過程のなかに位置付いてると感じながら、「とむらう」「とむらわれる」「とむらいたい」つてことが、羊屋さんの演劇とどんな風に結びつくのか聞きたくなつたんです。

羊屋 はい。**死生観つていうのありますよね。**「死ぬ」と「生まれる」つて書いて死生観。みなさん持つていてと思います。わたしの場合は、作品から見える死生観ということを、批評などで言及されることがあつたんです。そういうのつて、得てして、人から言われて気づくんですよ。自分ではわからないの。

改めて考えてみると、たとえば人生は、生まれてから死ぬつて一直線と思いがちだけど、スパイラル、螺旋を描きながら上に登つていくんじゃないかな？ そういうイメージとか仮説を、身体や言葉を使って、心象風景にしてゆくことをしています。あとは、異形な存在として、ゾンビのキャラクターを登場人物にした

上田 いや、単に高齢化なんですけれど。釜ヶ崎って人口密度が日本一高いので、人数が多いから、死ぬ人も多い訳ですね。

先ほどの儀式化のところでも思い出したの。わたし、時々、今いるその場所からビジョンが送られてくるんですよ。ココルームっていう喫茶店のフリをした場所を運営しているんです。そこは大正時代に作られた小さな建物なんです。それで、仕事が終わらなくて朝までいた日、ちよつとウトウト仮眠していた時に、急に、建物が、「昔、こんなだったんだよ」ってビジョンをバンって送ってきたんですよ。それは、砂埃がわあーって立ちこめている中、天秤棒で魚を売りに来てるような人たちがいて、「昔は賑やかだったんだよ。」って。

羊屋 夢じゃなくって？

上田 夢じゃないような気がするね。そういうことが、時々あつて、その場所からなにか送られてくるときに、死んだものたちと生きてるわたしの間^{あいだ}にある何かを、伝えようとしてくれているように感じるの。生と死は一直線でありながらも、その間^{あいだ}に何かあるのですよ。だから、この一直線と一直線の間^{あいだ}にあるだろうものを結構意識していて。だから、間^{あいだ}にあるこの何かを、なんとか示したいと思うんですね。

ていうのは、もう会いたくないと思っっているケースが多くて。亡くなりましたと警察から連絡が行つても、引き取つてくれないことが多いんです。半年間くらい、返事が来ない。どうするか決めきれないその間、遺体は冷凍保存されているの。だから、お葬式の時に棺から、ぼたぼたと水滴が落ちる。

羊屋 溶けた。

上田 そう。溶けた。そういうご遺体をよく見かけられるのです。そうやって冷凍されていて、半年経つてやつぱり引き取りませんってご遺族が言ったから葬式ができるんですけどね。でも、その亡くなった方は、残してきた家族に対してもう会いたくないと思っただかという、そういう訳ではないんです。

ココルームは、喫茶店ですけど、お酒も出します。お酒のせいかわかりませんが、けど、話してくれるんですね。「実はさ〜」って、残してきた家族への想いとかをね。彼の子供さんが、「自分は父親に捨てられた」と思っているのだったら、その時はそうだったかもしれないけれど、最後に子供さんに「あなたのことを想っていた」とお伝えしたいというか、思ってもらえたら良いんじゃないかなと思っっています。おせつかいですね。でも、見ず知らずのご遺族に、なかなかどのように伝えるらいいものか、難しいのです。

羊屋 うんうん

上田 それでわたし、みんなに詩を作ってもらおうのがすごい好きで、メソッドを開発しました。「こころのたねとして」といいます。二人でお互いにインタビューをして詩を作る。対話のなかで詩を作ってもらうんです。たねを持つてたり、渡したり、つてそうやって回していったらいいなと思うんですね。

羊屋 先ほど、詩集いただきました。

上田 もう一つ釜ヶ崎の「とむらい」の話ですと、釜ヶ崎には、身近な人に迷惑をかけてきている人が大変多いんですね。「逃げてきた」とか「捨ててきた」とか。それで、家族の方か遺族の方つ



羊屋 うーん

上田 **その中の一人。一郎さんっていう人がいて。ニックネームが一郎さんなんですけど、**見えませんかね？(写真集見せる)この強面のおじさんなんですけど。この方が亡くなって、2ヶ月くらい知らせがなくて、孤独死だったんです。でも、この一郎さんのご家族には、わたしたちは会うことが出来ないんですね。いらっしやっただけど、会うことが出来ない。何故なら、一郎さんは借金とか、犯罪とか犯してんじゃないかと家族に思われていて。

羊屋 関わりたくない？

上田 そうそうそう。だから絶対に教えないでくれって言われているんですね。警察にそう言われていると。でもわたし、一郎さんの写真集を、30冊だけ作っただんですね。(写真集見せる)もし流れ流れて、例えば一郎さんの子供さんに届くといいなって、本当に少ない可能性なんだけで作ってみました。

羊屋 伝えたいですよね、一郎さんが思っていたこととか、ご遺族の方が思っていたことを。この写真集がつなぐ。

上田 超おせつかいだと思つてます。自分の存在がですね、そこで大事にされ



ている感覚つてとても大切だと思うんです。むしろ、それを教えてくれたのがこの釜ヶ崎の人たちなんです。そのお返しとして、あなたの命つてものが、本当に大事にされていたつてことを、「うん、そう。」と思つて作つてみたんです。

羊屋 時間がかかりますね。わたし、今ちよつと、遺族の人にこだわつてゐるかもしれないんですけど、「釜ヶ崎に来てからのお父さんはこうだつたんだよ。」つて、遺族の方に伝わつたらいいな。

上田 そうですね。本当にいろんなおじさんがいろんな人生を語つ

羊屋 ココルームに女の方は来ますか？

上田 女性もいらつしやいますよ。どつちかつていうとかなり遅ましいですね。

羊屋 うん、泣きながらそういうことを語つたりはしない？ 今うかがつたお話のように、お家を捨ててしまつたとか、お家の人に顔を向けられないとかですか？ 女の方は何故来るんですか？

上田 女の人はね、いろんなケースがある。精神的な疾患を持たれてる方もいらつしやる。

羊屋 でも何か断ち切つて来るんですか。

上田 生きやすいから来てる部分もあると思います。かなりしんどい状況を持つてる方もいます。今も、気にかかつてゐる女性がいるんだけど、道端でぼつたり会つと、自分の話を時々わたしにパーソナルと話してるときがあります。なかなか厳しい状況の方もいますね。

羊屋 それは生活が？

上田 うーんと、生活とそして、彼女を巡る状況ですね。しかし、何をどうしたらいいのか、その方の場合だとちよつとわかんなくて。

ていくのですが。例えばこんなことをおつしやつてた人がいました。子供さんが3人いはつて、長男が自殺をしたと。それなのに自分は仕事があつたから全然構つてやれなかつたと言うんですね。母親も大変だつたらうに長男が自殺したのに全然取り合わなかつた。しかし、その方は、いま毎日毎日、奥さんの名前を呼んでは泣いてゐるらしいんですね。そして、その子供のことを想ひ泣いてゐると。今となつては。

羊屋 なんだか落語とかになりそうですね。

上田 で、その方の3番目の娘さんが0歳の時にすごい難病になつてしまつて、その為はどうしても高い注射を毎日打たないといけなくて、お金がたくさんかかる。彼は、当時トラックの運転手で、そのトラックを売ることにしたんです。200万で売れたそうです。今から20何年前ですよ。ところが、そのトラックを売つてから、生活がかなり苦しくなつたんでしようか、それから家族との関係がおかしくなつてしまつたと。それで、今はその3番目の娘は口をきいてくれないつて言うんですね。「お父さんがひどかつた」つていう風に言われる。そういう話をうちの店に来ては、お酒を呑んで話してゆくんですね。

羊屋 うーん。

わたし、10年くらい前に、身体にハンディキャップがあつたり、車椅子だつたり、セクシャリティの問題を抱えていたり、世間ではマイノリティと括られる方たちと演劇を作つたことがあります。

その時、参加する人たちを募集しました。募集の条件に、「自分の、あえて障がいと言いますが、障害を、自分として受け入れている方。さらに、その障害が魅力だつて思つてゐる方」つて書きました。ちよつと挑戦的だつたかもしれない。もしくは、その頃は、いや、今もかもしれないけど、障害者アートつて、例えば、目が見えない子たちが通つてゐる学校の子たちとアーティストがコラボするつていうようなもので、子供たちの参加する意志など二の次なんです。

でもそうではなく、自らその身体ともなやつてくる人に会いたかつたんです。集まつた人たちの中で、たとえば、当時60代の車椅子で生活をしている男性の方は、昨年お亡くなりになりましたが、「わたしは、生活は勝ち取つたんだ。今は文化がほしいから来たんだよ。」つて。生活の次には文化がほしい、今だつたらアートつて言葉なのかもしれないけど、意思を持った人たちがざらりと揃いました。セクシャルマイノリティ、摂食障害など様々でした。

文化がほしいとおつしやつてゐるけど、彼らに応答するために、演劇でいい

のかな？って戸惑いながらも始めました。

釜ヶ崎を訪れる人たちは、どうなんでしょう？ 生活のことも、詩を書くことも、していらいっしやる、そういうコミュニケーションなんでしょうか？

上田 0・62平方キロメートルが、あいりん地区の広さ。ニアイコール釜ヶ崎で、そこに二万五千人がいるんです。で、一万人近くが生活保護者で、85パーセントが男性という状況です。野宿している人たちや、住居が不安定な人たちは大体500人前後というような場所です。

わたしたちが日頃多く出会っているのは生活保護受給者の方です。野宿の方とは関わりはもちろんあるんですけども、様々なプログラムをやっているときに、彼らはカンカンを集めたりとか仕事をしないといけないので、なかなか一緒に何かをするってことは実は難しいんです。でも、毎月一回夜回りをしておむすびを配ったりしています。喫茶店に時々顔を見せてくれたり、中には詩や俳句が好きで、わたしのことを「先生」って呼んでくれて、差し入れと一緒に、作った詩や俳句を持って来てくれるという方もいます。

そうした人たちとの関わりのおかげで感じるのは、自分が生きている証としての表現を、わかってらっしゃるなというこ



レに呼んでもらった頃のことなんですけど、親しくなった方がガンで、もう末期だったんですね。わたしたちはトリエンナーレの準備していたんだけど、ちょうど、横浜に入る前の日、その方は亡くなりました。わたしは、亡くなる瞬間、そばにいました。亡くなる一ヶ月くらい前に、**彼はわたしに言いました。「寝てばかりいるから、天井が真っ白で寂しいんだ。」**って。わたしたちよくみんなで習字を書いていたから、その習字の紙、貼りましょうか？って言ったんですね。そうしたら、「いっぱい貼ってくれ。」って言うから、いろんな人の習字の字を、その方の狭い部屋の天井から壁から貼ってみました。

とです。コールドームは、喫茶店の場になんとなくいらっしやる方たちや、生活保護受給者の方たちへ、プログラムを提供する場所や機会を作っていますけど、そこで出会う方っていうのは、すごく揺れていらっしやいます。

例えば、「釜ヶ崎合唱団」という合唱団を作りました。最近よくお声がかかるんですね。「歌いに来てくれ」って。それでお弁当が出るというのがわかると、急に人数が増えてるんですよ。

羊屋 ご飯大事。

上田 大事なんです。合唱団に参加した人たちは、最初はなんとなかったかもしれないけれども、やっぱりいろんな人に出会うし、笑ってもらったり、中には感動して涙を流してくれる人もいますしね。

それから異なる年齢の方たちにもたくさん出会うので、それっておもしろいですよね。そういうこともあって、歌いに来てくださる方も大変多いと思います。でもやっぱりね、なにせ高齢なので体調に波があつて入院されたりとか、亡くなったりっていうことも多いので、そうした出会いができた後、どうしていくのかっていうことも考えます。例えば楽しいけど、会えなくなったら寂しくなるじゃないですか。

2014年のヨコハマトリエンナー

羊屋 壮観ですね。

上田 そうなの。それで数日後に行ってみたらね、その習字の横に、紙が貼つてあつて、お手紙が書いてある。彼は言うんです。「書いてくれた人に返事を書いたよ。」って。「自分が死んだらこの習字は、きつとその人の所に戻るだろうから、自分が今、習字を見て思ったことを書いた。」って、なんかすごいでしょ。

羊屋 それを書く為に、書くまでは生きていようとか、やっぱり身体が意志を持つのかな。直筆でしょ？

上田 もちろん直筆ですよ。

羊屋 例えばこう、「青空」っていう習字だったらそれに対して…

上田 なにか返事を書いている。

羊屋 返歌みたいな。返しの歌みたいな。

上田 そう。見ず知らずの人へ、返事を書いてる。この応答は、彼にとつては人生の終いですけど、いろんな人が関わったことで、ほぐれたんじゃないかな。ほぐれながら、自分の人生をおさめられたのではないかなって思う。わたしたちは、その彼の最期の最後に立ち会わせてもらえた。それは、彼の死が開いたもの

だったから。

なんとまあ生きてゆくことと死んでゆくことの豊かきみたいなものをね、教えてもらったなと思って。

羊屋 生と死が、ほぐれて、おぎまってる、ひらいて。

上田 そう、彼とのことはまだ続くんですよ。翌日、ヨコトリに行つて、わたしの手には、まだ死臭が残っていましたよ。でもそれもそのままに、展示作業に入りました。

「作品を貼る大きな壁を前にして、それに更に、絵を描きたい。」と、言いましました。ボランティアのサポーターのみなさんに、彼が亡くなる三日前の会話を話したんです。それは、和歌山県の海の話でした。「わたしが、一本だけ、海の波の線を引きますから、後は、みなさん、描いてください。」って託しました。

わたしが描いた一本の波に、海の波を描いてくれて。8mくらいあったかな。大きい波が書き足されて、暫くして行くと、本当に素晴らしい和歌山の海ができて、本当に素晴らしい和歌山の海ができて、ありがとうございました。

その瞬間、展示会場のこの辺でね、亡くなったあの方が、にやつと笑つて、ウインクしてくれたような感じがあつて。このヨコハマトリエンナーレでいい展示ができるなつて、確信したの。そんなことを思い出しました。

後に、普通に会える場所つていうのが大事だから、普通に機能してるんですね。

羊屋 劇場なんかも、演劇をやる人と見る人しか、その時に集まらない。もっと演劇を使って、どうでもいい時間を一緒に過ごす場所、それを日常と言つたりできるのではないのでしょうか？ ひとりのプライベートではない部分の日常を、一緒に過ごす場所が、本当に少なくなっていますね。路地でも道でもいいんでしょうけど、でも人工的に作るとまた変な感じになりますよね。

コキールームは、自然に、日常の時間と場ができていったと思うんですけど、最初はどんな喫茶店にしたかつたんですか？

上田 喫茶店は、確信犯ですね。今の場所は狭くて、事務所はありません。わたしは喫茶店のカウンターのL字になつた狭いほうにいますけど、スタッフはお客さんが増えれば、パソコンを持つて別の場所に行くしかなくつて、逃げ場もないし、そこにいるしかない状況になつてしまう。

羊屋 広さはどれくらいですか？

上田 カウンターで6人くらい座れて、奥に、四畳半の小上がりがあつて、そこにちやぶ台が置いてあります。お昼と夜

羊屋 それは残つてないの？ 終わつたら撤収しちゃうつて。

上田 撤収しちゃいました。

羊屋 うーん

上田 うーん

羊屋 うーん、そうか。そのいろんなことが起こるコキールームつて場所、いろんな人から、「行つたほうがいいよ、假奈代さんに会つたほうがいいよ。」と、勧められながら、わたしまだ行けてないと思つていたら、この四月に新しくなるつて聞いたんですけど。コキールームは、訪れる人にとっては、日常なんじゃないか？ それとも、日常とは違う、お祭りとは言わないけど何か違うもの？

上田 恐らく、日常のほうなんです。喫茶店のふりをしてるので、基本毎日10時から夜7時、8時までやっていきます。何かプログラムを行うときは、別に会場を借りることが多いですね。だから、催しものがないときに、うちの喫茶店にいらつしやるので、コキールームは日常なんです。日常の場所つてとても大事です。ハレがちよつとだけあつても、それでは、済まないじゃないですか。ハレがあつた



になると、スタッフみんなまで、ご飯を食べてもらうんです。スタッフはみんなお給料が安いから。お客さんには、700円もらつて、ご飯を食べてもらうんです。そんな場所です。

羊屋 美味しそうですね。

上田 はい。天井には、みんなで書いた習字が貼つてあります。現代つてけっこう、みんな孤食ですよ。一人でご飯食べはりますよね。それが、ちやぶ台のところ、最大でも10人ほどですけど、座つてぎゅうぎゅうになつてご飯を食べるときもあるんですね。

羊屋 そういう喫茶店にしようと思ったんですか。

上田 そうなんです。

羊屋 そういう人たちが来るんだろうなと思つて作ったの？

上田 そうです、そうです。だから「喫茶店のふり」って言い方をはつきり打ち出したのは、ここ数年なんです。だって本当に真面目に喫茶店している方に申し訳ないと思つていて、でも今はもう「ふり」です。一時期、スタッフがたくさん辞めてしまった時があつて、それでしようがないから、おつきい紙に「**ココルームカフェの過ごし方、ここは参加型カフェです、できることはなんでもしてください！**」って書きました。喫茶店だからといって、お金を払つたらなんでも出てくる訳じゃないのよ！って、訳のわからないことを言い出してですね。「一緒にやつてください」っていうことにしました。

羊屋 でも、お金を払つて、食事や場所や時間を提供されている場所ではある？

上田 お金払えない人もいっぱい来ますよ。

羊屋 慈善事業ですか？って、言われま



羊屋 おお。

上田 いや、解決つていうかね、人つて、困り事があつたときに、自分が、どこに相談に行けばよいのかわかれば、大体解決しますよ。多くは、わかんないから困つてるんですよ。例えば、役所の窓口で怒られたとか、字があんまり書けないとか。でもここは、「なんかしてくれらしいよ。」って思つてくれるらしくて、実際いらつしやつて、無理難題持ちかけられますけど、わたしたちも、「大変ですね。」とか言いながら、「はあ」って、ため息、こんな感じ。でも、釜ヶ崎の街が凄いのは、いろんな諸団体があつて、いろんな経験を積んだ方がいらつ

せんでしたか。

上田 もちろんNPOつていうだけで大変ですよ。NPOは、国から補助金が出て、みんなにサービスをするもんだ。と、釜ヶ崎のおじさんたちや多くの人が思つてますからね。「補助金」もらつてません。」って答えても納得してもらえない。

羊屋 水は自分で。

上田 そうそう。でも、例えば野宿の方とかね、あえて分別もしはるんです。そんなしよっちゅう来ないんです。来るときは、手土産を持つてくるとか。

羊屋 なるほど、手土産。

上田 どこにも「相談乗ります」なんて書いてないのに、ありとあらゆる相談を持ち込まれるんですよ。本当びっくりです。「家出人を探してください。」とかね。**わたしは探偵じゃないっていうの**にね。

羊屋 それはなんか、假奈代さん含めて、そのスタッフの人たちで解決できる部分は解決したりしていくんですか？

上田 はい。

しゃるんです。

羊屋 問題によつては、その専門の団体に振つてゆくのか？

上田 そうです。その団体の方たちのおかげで、相談しに来た方の生活が整い始めるわけです。それで、うちにコーヒー飲みに来てくれて「元気にしてるよ」って、そういう話ができる。なんともない第三の場所つていうのがすごい重要になつてくると思うんです。

羊屋 本当「そうだと思います。そうだと思います。」

上田 だから、ココルームは、演劇的として。台本ないのに、日々劇場と言つても過言ではないくらい。

羊屋 いい俳優はいますか？

上田 いい俳優だらけですよ。ふふ。

羊屋 なんか、合唱団もそうですけど、ちゃんとお稽古するんですね。

上田 稽古してるんですけどね。でもちようど、助成金とか切れたときに、「どうする？ 先生に謝金を払わないといけないし、みなさんちよつとくらいいカンパするかな？」って言うと、とたんに参加

数減るんです。「300円でもダメなのか、はあ。」って感じですけど。それでもまあなんとか続いています。月に一回でも集まれたら、やっぱり良いんですね。安否確認も含め。

羊屋 生存確認ですね。そうだ、近所にニューココルームが出来るんですよ。

上田 そうです。ゲストハウスをしようと思って。泊まれるんです。これまた、何が繰り広げられるやらですね。

羊屋 初代ココルームがオープンしてからは、何年経ちましたか？

上田 もうね、14年。

羊屋 14年。假奈代さんがやってらっしゃるライフワーク。これはこの先も、続いていくと思いますか？ もう必要ないつてこともあると思いますか？

上田 あと300年くらいかかるんじゃないかなと思うてる。その300年の為の一步目かな、みたいな気持ちです。もうちょっと実験と検証をしていこうと思うんですね。

羊屋 300年のうちの、その14年。

間 だって、なんだって間にあるもんねと思ってたんだけど、つい去年くらいから、間に閉じ込められたらまらないという気がしてきて。

「わたし、間に在りながら、間を突き抜けてくつていうこと **したいんだわ」**って気がついたの。ずっと間を作る為の表現をしていたんだけど、時々突き抜けていく表現っていうものを入れながら、続いてゆくんだなって。

羊屋 假奈代さん、間を見つけてるのが上手だから、すぐ、間を見つけちゃうんですね。それで、そこに佇んで、ちょっとなんか良い間作りをして、それからボンと突き抜ける。

上田 でも、別に「自分が」っていう訳ではないの。

羊屋 何者かに押し出される感じですよ。ビジョンを受け取って。

上田 そう。何か突き抜けてて、それで、また「新たな間にいる」みたいな。

羊屋 あの、今ね、「時間です」っていうお知らせがきたんですけど。

上田 あ、時間の間も、あいだだね。

上田 そうです、まだひよっこです。

羊屋 わたしも、「東京スープとブランケット紀行」は、まだ2年しかやってないから、ほんとにヨチヨチぐらいです。

上田 ね、でも始めないと。

羊屋 そうですね。わたしは演劇が母体ですけど、**ある時ね、「わたしには演劇が小さすぎるんだ。」**って思うようになりました。「東京スープとブランケット紀行」のように、演劇から遠く離れたことにタッチするために、ただ理由をつけたかったのかもしれないけどね。でもまあ、わたし、元々、演劇から飛び出してる。出っ張ってるんですけど。

上田 ふふふ。

羊屋 うん。演劇ではない土俵で、冷やかし半分というか。でも挑戦と、そして、いつも通りの態度でできたら良いかなと思っはいます。どうなることやらです

上田 この日常の細かいところを見ている訳ですよ。あーだこーだってね。

わたしの場合だと言葉とか詩なんだけど、「日常と詩の間」間のものが好きなんだわ。」と、ずっと思ってたんですね。

羊屋 間ですね。時と時の間。そんな感じで。假奈代さん、初めましてで、たくさん話していただいて、どうもありがとうございました。

上田 ありがとうございます。



青ヶ島から始まったリサーチプログラム「青ヶ島ブランケット」が、次のステージに向かいました。当初、北海道まで行き自分たちの手で羊の毛を刈りブランケットを作ろうと話を進めていきました。しかし、ブランケット作りと終焉を見つめるプロジェクトの関わりを探る過程で、東京の街につながるのある殖産として、シルク、養蚕で手がかりのあった奥多摩に着目するに至りました。奥多摩にはかつて小河内村という村があり、昭和32年にダムに沈んでいきます。ダムに沈んだ村のそばに行くということが2年目のリサーチになりました。奥多摩に滞在して、見たものは終焉のプロセスとそこから移動した暮らしの形。ここから地域の変化の始まりが見えました。

これらのリサーチを体験し、毎月開催している「江古田スープ」で話を積み上げていくことで「とむらい」は生まれました。失った人やものや時間などについての話をする時にそばにある「お膳」です。

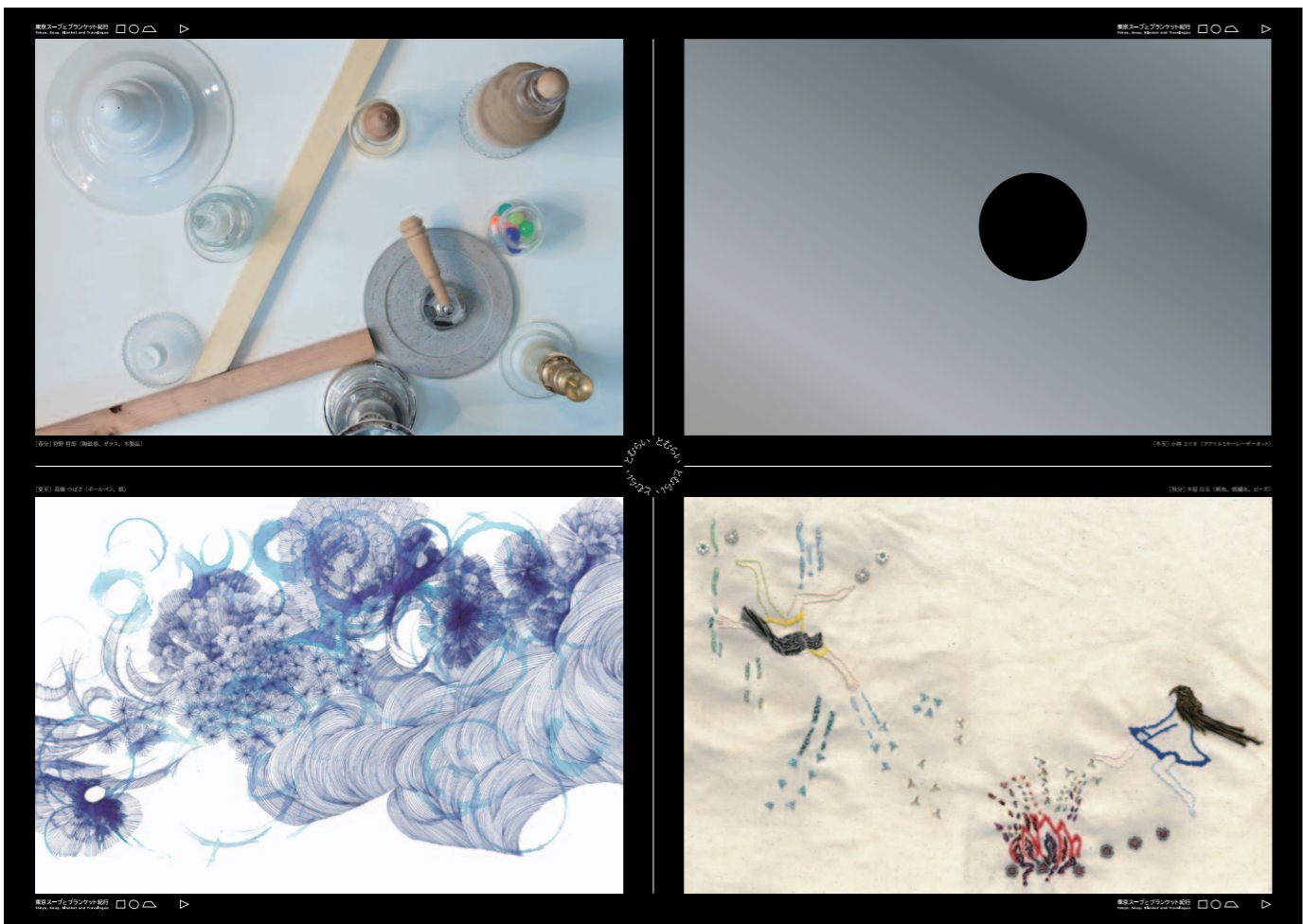
日々の生活の中で季節というのとはとても重要なものです。私たちはその中でも古くから使われている二十四節季に着目しました。春分、夏至、秋分、冬至をピックアップして、羊屋白玉を含めた4人の作家に参加してもらい、各々の思うとむらいの場に

置かれる作品を作り、出来上がったのが「とむらい」です。

この作品は、終焉を迎えたものごとについて食事をしながら語り合う場に置かれるものです。もしかしたら、親しい間柄においては日常的に行われていることかもしれない。私たちの作品を媒介にして行うことで、いつもより少しだけフォーマルな小休符を置いて一息ついてもらいたい。それが私たちの「とむらい」という作品に込められた提案です。



写真 対談紀行 2015 秋篇では「とむらい」を使った実際の様子を上映(手前作品群: 狩野哲郎)



「とむらい」ポスター版

【東京スープとブランケット紀行】とは

statement: ディレクター羊屋白玉の言葉

わたしにとって東京は、とっても長いこと、未来都市だった。今は、遺跡の街を歩いているように思う。どちらも美しい調べだが、組曲「東京」の楽譜は、いまや、生活者であるわたし、演奏者であるわたし、が追いつかないほどの加速記号でいっぱいだ。この楽譜に、泉のような小休符をいくつか、記したい。

project: 東京(住)+スープ(食)+ブランケット(衣)+紀行(徴)

生活に関わるささやかなテーマ。そのいくつかを同時進行で取り扱ってゆくと、各テーマが影響し合い、分裂と統一を繰り返しながら、やがて大きなひとつのテーマに辿りつく。その最初のいくつかのテーマがこの4つです。

東京 一箱

夢の一箱を、東京に転がす。

江古田 スープ

東京のラビンスな交差点、江古田で迷う。

青ヶ島 ブランケット

青色のヤポネシアアイランドから、東京を眺める。

対談 紀行

転がしたり、迷ったり、眺めたり、そして、東京と話したい。

この4つのプロジェクトが、転がりながらも成就する時、わたしたちの現前に広がる世界が一瞬止まり、それまで費やしてきた時間のプロセスが立体的に問いかけてくる。そんなアートプロジェクトを目指しています。

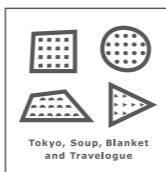
people: 運営しながら創作するわたしたち

ディレクター：羊屋白玉 アシスタントディレクター：伊藤馨 チーフアドミニストレーター：宮原清美

アシスタントアドミニストレーター：糸山裕子 齋藤優衣 デザイナー：草柳亮

テクニカルディレクター：糸山義則 フォトグラファー：中澤佑介

主催 東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、一般社団法人指輪ホテル



『とむらい』作家のご紹介(担当の時節と『とむらい』制作にあたってのコメント)



Photo: Takashi Arai

『春分』(陶磁器、ガラス、木製品)

狩野哲郎(かのうてつろう) 美術家

風景が変わった瞬間とはいつか。いつだって変わらず平坦なものなどあるはずがなかった。変容は何者かの意思であり、結果である。それをあらためて受け取ってこそ、目の前の風景の変化にやっと思ふことができる。



Photo: Chihiro Kanzaki

『夏至』(ボールペン、紙)

高橋つばさ(たかはしつばさ) 画家

ゲルインクのボールペン1色で絵画制作をしています。インクの色が滲みだした器の痕跡から、「私よりも前にここにいた者」の存在を想う食卓を作りました。



『冬至』(アクリルミラーレーザーカット)

小林エリカ(こばやしえりか)作家・マンガ家

冬至の太陽の角度です。



photo: Sakiko Nomura

『秋分』(帆布、刺繍糸、ビーズ)

羊屋白玉(ひつじやしろたま) 東京スープとブランケット紀行ディレクター

みなさんが大事にしている原風景を、このお膳に重ね合わせて、今はいない誰かと、何かと、一緒に食事をする時間が、日々の生活に訪れますように。そう想って描きました。



写真 対談紀行 2016 春篇にて(左:羊屋白玉、中央:狩野哲郎、右:高橋つばさ)



東京スープとブランケット紀行『ためらって、さまよって、とむらい』

発行 アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
監修 羊屋白玉
編集 伊藤馨 宮原清美 齋藤優衣
デザイン 草椰亮
写真 中澤佑介、東京スープとブランケット紀行事務局
印刷 グラフィック
発行日 平成 28 年 3 月

本書に関するお問合せ先

東京スープとブランケット紀行事務局

web <http://soupblanket.asia>

mail sec@soupblanket.asia

© 一般社団法人指輪ホテル

© アーツカウンシル東京

【東京アートポイント計画】とは

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都とアーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結びアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となる NPO を育成します。

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-28 九段ファーストプレイス 8 階 TEL 03-6256-8430
<http://www.artscouncil-tokyo.jp> E-MAIL info-ap@artscouncil-tokyo.jp



東京スープとブランケット紀行『ためらって、さまよって、とむらい』（非売品）



東京都

ARTS COUNCIL TOKYO

